

もので、単体で埋設されることもあるが、石で構築された入口部を伴うこともある。大和や河内に集中するが、九州では唯一、大分県古宮古墳で発見されている(図2-120・4)。

第二節 生活と生産

一 集落と建物跡

集 落 跡

弥生時代には地形に沿って不整形の、あるいは円形に近い形状の溝で画した環濠集落が各地で発見され、それぞれ地域の中核的な集落と見なされている。古墳時代にも方形を基本とする区画溝に囲まれた豪族(首長)居館と呼ばれる遺跡が発見されているもの、この内部は首長一族のための意味で私的な空間であった。首長居館以外的一般集落は弥生時代のような人工的な区画施設をもたず、したがってその広がりや地形をもとに推測するしかないことが普通である。弥生環濠集落が自らの集団を他者と区別するためのものであり、かつ防衛的な性格が認められるとするならば、古墳時代集落は開放的で、戦のない時代を反映するものといえる。

当時の集落跡は比較的標高の高い、現在の水田下で発見されることが多い。弥生時代の集落と重複することもあることだが、行橋市下稗田遺跡のように丘陵上で発見されることは比

較的まれなようである。これも、平和な時代が訪れたために耕作に不便な丘陵から降りてきたものと考えられる。それとともに、丘陵が、弥生時代墳墓に比べて遥かに広い面積を要する古墳の適地と見なされたことにも一因があろう。

集落は一般的に堅穴住居と掘立柱建物で構成され、後者には住居と倉庫があつて柱穴配置で区別される。また、生活に欠かせない水は湧水や河川を利用することが多いようであるが、井戸を掘削することもある。

豪族居館 溝又は柵列によつて方形に区画された古墳時代の集落遺跡を豪族居館と呼んでいる。文字どおり、前方後円墳などに埋葬される首長が占有する空間と見なされるもので、古墳時代前期から存在が確認され、その起源は弥生時代に遡る。

古墳時代前期の代表例の大分県小迫^{おごつせ}辻原遺跡は台地上にあつて、弥生時代から古代にいたる複数の環濠とともに、古墳時代前期に同時に存在したとされる二基の方形環濠が調査された。東側の環濠は幅三・四^{メートル}、深さ一^{メートル}余の溝を巡らせ、溝を含めた一辺長は約五〇^{メートル}の規模をもち、内部に掘立柱建物の住居跡が確認されているが、その詳細ははっきりしない。西側環濠は一辺長四〇^{メートル}ほどの規模で、ここでは環濠の内側に目隠しとなる柵列が巡らされていた(大分県教委「小迫辻原遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』V、一九八八)。

五世紀後半から六世紀はじめの群馬県三ツ寺遺跡はその一

部が発掘されただけであるが、古墳の葺石を思わせる環濠護岸の貼石や規則正しく配列された建物跡など、古墳文化中心地から遠く離れた関東地方で発見されたことも手伝って大きな驚きであった。複雑な配置の張出し部を付設する一辺長八〇メートルほどの方形区画を幅三〇メートル四〇メートル、深さ三メートルほどの溝で取り囲むもので、方形区画外縁には二重の柵列が配され、その内部は更に複数の柵列によって南北に区画されている。調査範囲はその北東部の一角であったが、南側の区画で約一四メートルの規模の庇をもつ方形の主屋、二・五メートル二〇メートルの長屋状の建物跡、井戸や石敷きの祭祀遺構と思われるものなどが、北側の区画では生産工房と考えられる竪穴住居跡だけが発見されている(図2-95)。

更に二〇メートル近く離れた位置で同様な張出しや内部区画を伴う一〇五メートル一六五メートルの長方形に近い、より大規模な原之城遺跡が発見された。これらの調査により、首長が生活や政治・祭祀活動を行う掘立柱建物を主体とする場、従者や各種の工人が住まう竪穴住居を主体とする場、そして物資を蓄積する倉庫群などが首長居館を構成する要素として指摘されている(都出比呂志「古墳時代の首長居館」『日本通史』二 古代一、一九九三)。小迫辻原遺跡の柵列をもつ区画が神聖な祭事・政治を行う場、他方の区画が生活の場といえようか。ここでは従者の居住区や工房、倉庫などを配置するにはスペースが狭いようである。もともと、古墳時代前期の首長はもっぱら司祭者的性格がいわれてお

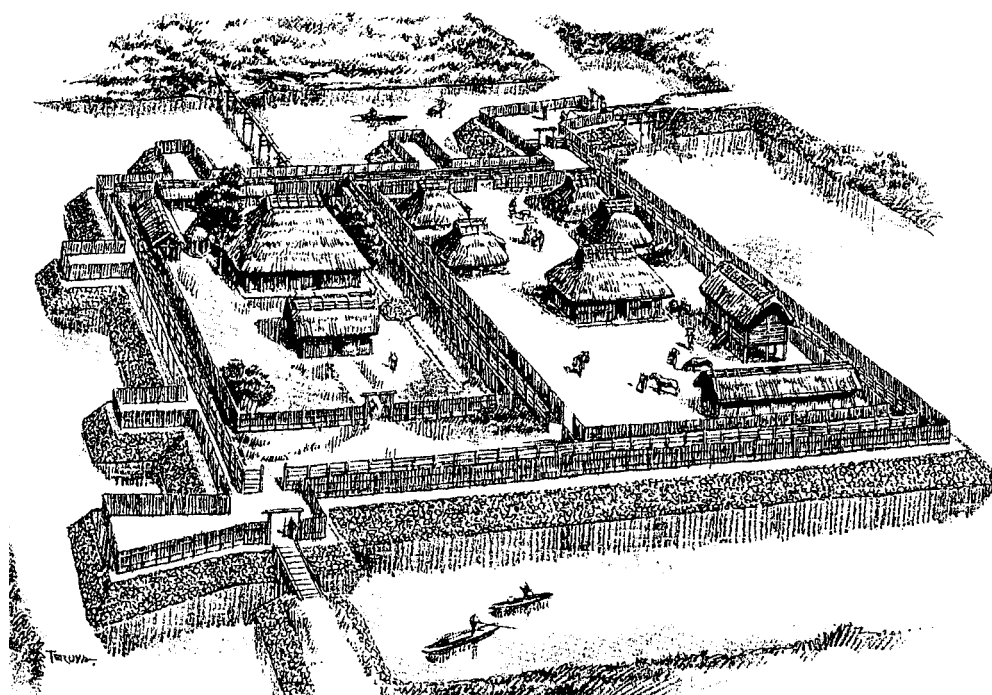


図2-95 群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡復元図
(白石太郎『古墳とその時代』2001より)

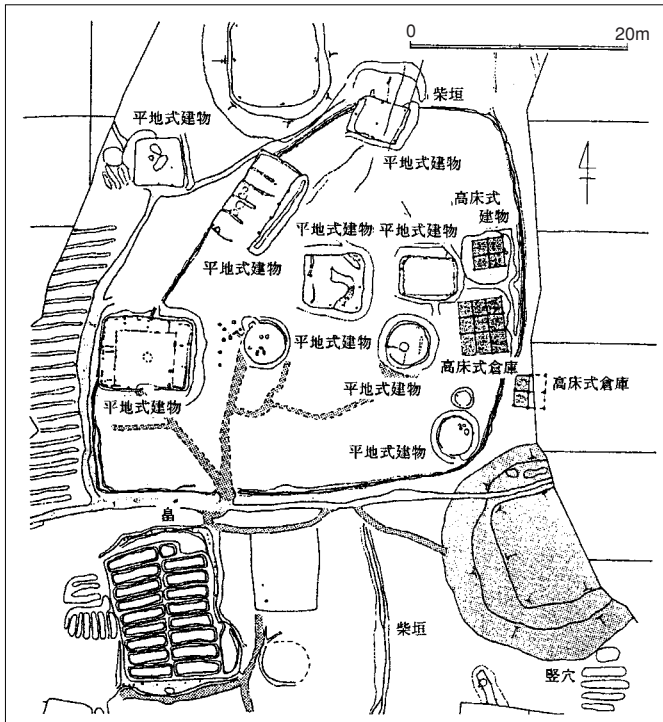


図2-96 群馬県黒井峯西組遺跡の屋敷地の一部
(白石太郎『古墳とその時代』2001より)

り、必要なすべてを居館内に集合した三ツ寺遺跡とは時代・社会背景の相違に理由を求めることもできる。

『記紀』に記された歴代天皇の宮はまだ詳細が不明である。
一般民衆の集落 通常の遺跡では建物の上屋はすでに失われ、柱根が残存することまれで、私たちの生活になじみのある家の区画や道路、畑といったものも不明である。しかし、六世紀後半に榛名山の噴火によって埋没した群馬県黒井峯遺跡で

は二層もの厚さの軽石に覆われたために集落内の最小単位を囲む芝垣や踏分け道、畑などの細部まで明らかとなった。遺跡は一辺長九メートルの大型竪穴住居跡を中心に小竪穴住居跡が散在し、小竪穴住居跡に接して芝垣に囲まれた空間が配されている。芝垣の内部には数棟の平地式住居跡と倉庫跡・家畜小屋などがあり、その内外に畑地が広がっている(図2-96)。ここでは大型竪穴住居跡を集落の長のものとし、小竪穴住居跡に居住した人々が、芝垣に囲まれた平地式住居跡に居住する人々も含めてその範囲の土地などを使役・管理したのであると想定されている。住居形態に厳格な階層差を読みとるのである(能登健「古墳時代のムラ―群馬の遺跡群は語る」『図説古墳研究最新線』一九九九)。通常の集落遺跡では、圧倒的多数の竪穴住居跡と少数の倉庫を含む掘立柱建物跡を発見するのが普通であり、平地式住居跡というものをどう把握するのかという点で、この調査結果をどこまで一般化できるものかまだ問題が多いと考えられるが、六世紀の農村を蘇らせた意義は大きい。

建物の姿

古墳時代の建物はもちろん残存しない。残っているのは方形に掘り込んだ竪穴住居の痕跡と柱跡を残す掘立柱建物の痕跡である。しかし、当時の建物の姿を生き生きと映し出した考古資料が存在する。一つは奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡と呼ばれる四世紀後半に我が国で作られた銅鏡であり、そして全国的に出土する家形埴輪である。

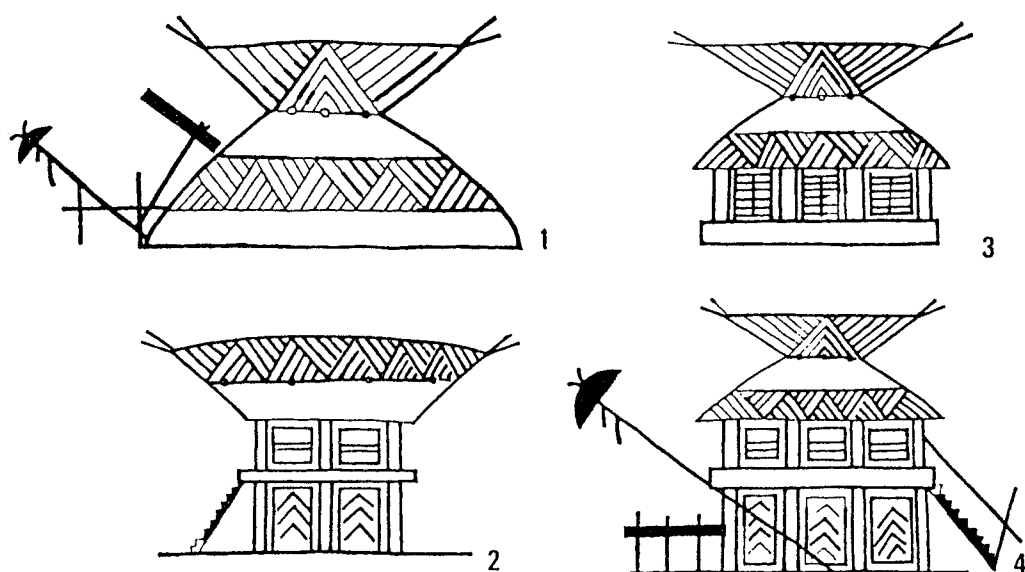


図2—97 家屋文鏡の建物
(小笠原好彦「住居と倉と井戸」『古墳時代の研究』2、1990より)

埴輪の場合、首長のための古墳に祭器として供されるものであることから高床式の特殊な建物や倉庫、平地式住居などが一般的である。棟に堅魚木かつおぎを載せたり、組み物を線刻するといった、よりリアルに作られたものもあって建築史上の好資料を提供している。

家屋文鏡には四種類の建物跡が描かれる。堅穴住居であるが、貴人にさしかける衣笠きんがさをさしかけたもの(図2—97・1)、高床式で側面の柱が三本となり、階段をもつ倉庫と思われるもの(同・2)、低い段の上に立つ平地式の住居と思われるもの(同・3)、高床式となり階段やテラス状の施設、そして衣笠をもつ特殊な建物(同・4)である。ここに描かれた堅穴住居は一般民衆の住居と共通するが、衣笠の存在からやはり首長の住居と考えてよからう。四世紀の中規模前方後円墳である奈良県東大寺山古墳出土鉄剣の銅製柄頭にも同様の図案が出されていて、首長層の居宅としてもなお堅穴住居が使用されていたらしい。この四種類の建物は首長居館を構成する建物跡群と合致する。

高床式の建物は祭りの場で、伊勢神宮など古式を残す社殿がその姿を現在に伝えるものと考えられている。

倉庫は九本の柱で構成される二×二間の規模の例が多い。側面観は三本の柱からなり、遺跡で九本の同大の柱穴が方形に並んでいれば躊躇なく倉庫跡を想定する。しかし、五世紀前半の

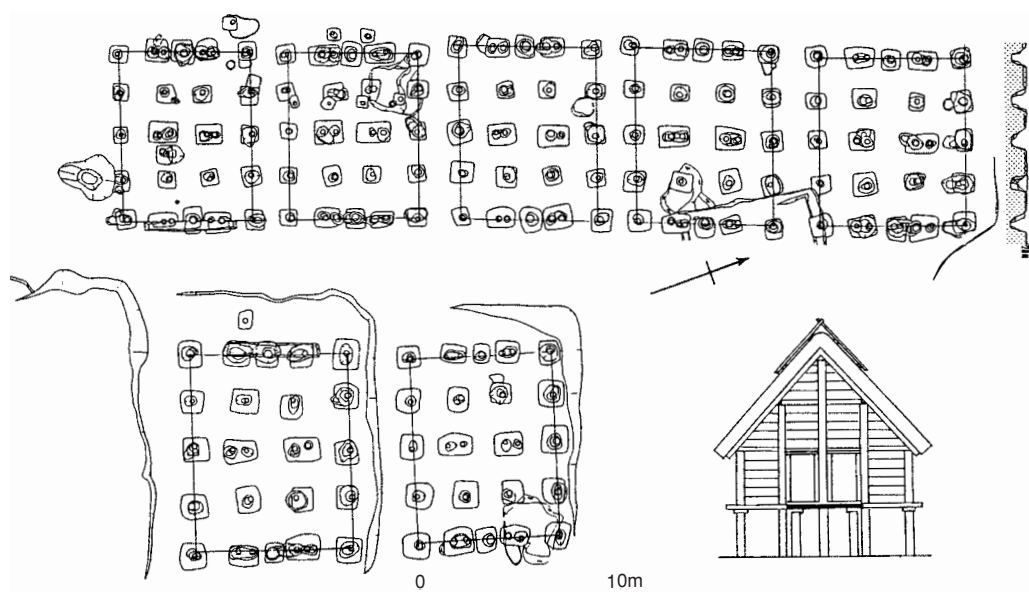


図2—98 和歌山県鳴滝遺跡の倉庫群

(小笠原好彦「豪族の居館と構造」『古代史復元』6、1989より)

和歌山市鳴滝遺跡では四×三間の倉庫跡七棟が二列に並んで(図2—98)、同後半の大阪市法円坂遺跡では五×五間の倉庫跡がやはり二列に並んで一六棟発見された。これらの大規模な倉庫跡は地理的位置からもヤマト政権直轄の遺跡とされている。

平地式の住居は、遺跡の中では三ツ寺遺跡の主屋のように長方形に外周を巡る柱穴群として現れる。しかし、黒井峯遺跡のように集落内で多数を占める状況が一般化できるのならば、痕跡を残さない構造を想定する必要があるのかもしれない。

竪穴住居は、通常は一辺長五メートル前後の方形に地面を掘りくぼめ、その床面に柱穴や炉・カマドを設けることが普通であるが、中には一辺長一〇メートルほどの大型の例もみられる。指導者的立場の人物の住居跡あるいは集会所的な性格が考えられる。柱穴のみで構成される建物跡の場合は時期を示す土器が出土するのはごくまれで、年代を特定することが困難なことが多い。

しかし、竪穴住居跡の場合は土器が多く出土するのが普通で、土器によって住居が使用された時期をある程度限定することができる。したがって、以下では竪穴住居跡の時代的変遷について、新吉富村池ノ口遺跡を中心に略述しておく(図2—99、福岡県教委「池ノ口遺跡」『一般国道一〇号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第三集、一九九六)。

弥生時代の終わりから古墳時代のはじめごろは二本の柱で屋

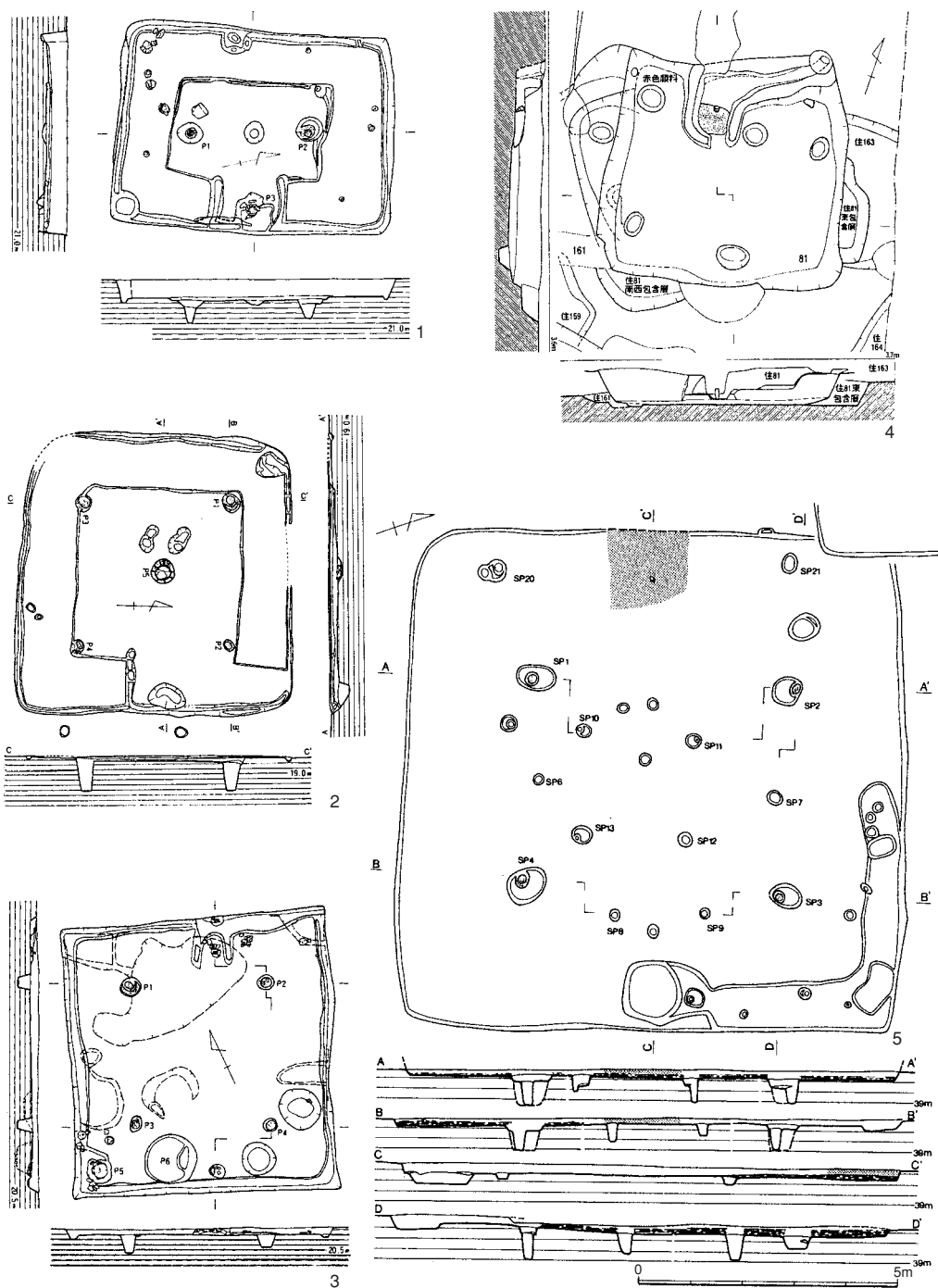


図2—99 北部九州の古墳時代竪穴住居跡 (1/120)

1 新吉富村池ノ口遺跡10号住居跡 2 同33号住居跡 3 同27号住居跡

4 西新町遺跡第12次調査81号住居跡 5 筑穂町木下遺跡 SB 27

根を支える形態のものが主流で、平面型は長方形となつて、柱の外側の壁際にベッド状遺構と呼ばれる一段高い施設を伴うのが一般的である。そして中央部に炉跡が位置する(図2-99・1)。ほどなく、柱が四本のものが現れ、ベッド状遺構の配置もバラエティーに富むが、炉跡の位置はそのままである(同・2)。この変化の理由は明らかでないが、二本柱に比べて四本柱のほうがより広い空間を確保できるのは間違いない。これ以降の住居跡はすべて四本柱となる。

そして、五世紀後半までには住居跡の北あるいは西の壁に粘土などを使用して造り付けたカマドが普及する(同・3)。カマドも朝鮮半島から伝わった新しい技術の一つで、炉に比べて熱効率を高めることができるため食生活に大きな変化をもたらしたことと思われる。なお、我が国でのカマドの初現は福岡市西新町遺跡で、古墳時代初期の三世紀に遡る(同・4)。朝鮮半島系や山陰地方系の土器を多く出土する特殊な遺跡で、交易の拠点であったと考えられており、いち早くカマドの技術が導入されたことも容易に理解できよう(福岡県教委「西新町遺跡Ⅱ」『福岡県文化財調査報告書』第一五四集、二〇〇〇など)。

時として、カマドから延びた帯状の粘土が壁に沿って張り付いたものが見られ、オンドル状遺構と呼ばれている(同・3)。カマドで生じる暖かい空気を粘土で作ったパイプ状の施設に取り込んで暖房などに再利用したものであろうと推測されている。

る。名前のとおり、朝鮮半島の暖房施設を意識しての命名であり、この種の住居跡に居住した人々は渡来人に関わると推測されている。京築地域では新吉富村や椎田町、豊前市などで五、六世紀のこの種の住居跡が比較的多く発見されていて、注目すべき状況にある。

二 古墳時代の服飾

当時の人々がどのような衣装をまとい、装飾品を身につけていたかはさまざまな造形が見られる人物埴輪が一等の資料であり、古墳から出土する装飾品も実物を窺い知る遺物である。

人物埴輪は五世紀後半ごろから現れるもので、したがってここに表現される姿が年代的にどこまで遡れるものか定かではない。また、豪族の墳墓である古墳に使用されるという性格から、各階層を網羅的に造形しているとも限らない。農夫像があるといっても、それが一般的な農夫なのか、あるいは指導的地位にある農夫であるのかは即断できないという制約がある。しかし、最良の資料であることは確かである。

男性の場合は上半身の衣(きぬ)(『記紀』による名称、以下同)、下半身の褌(はかま)からなる。衣は前面で左まえに合わせて上下二か所を紐で留め、褌は太いズボンで膝下をやはり紐で縛る。女性の場合は男性と同じような衣と長いスカートのような裳(も)の組合せとなる。巫女と思われる埴輪では袈裟のように右肩から左脇へ布